



ウグイ ◎コイ科 琵琶湖のウグイは吻端が前方にのび、口は前方に開口する。琵琶湖に流入する河川のウグイは口が下向きに開口し、吻端はやや下方に湾曲する。ウグイは広く分布する魚であるが、方言名はあまり多くなく、ハヤやナギバヤなどが代表的。写真の魚は産卵期の雄。繁殖色で体が赤くなっている。体長11~45cm。



ニゴイ ◎コイ科 コイよりも鱗が細かく、体色は産卵期を除けば白っぽい色をしていいる。横の上など上方から見るとその輪郭がマゴイによく似ているため「似鯉」の名称が与えられたものと考えられる。口は下向きで、産生の餌生物をあさるのに都合よく出来ている。体長35~45cm。



ハス ◎コイ科 日本にすむコイ科魚類の中で唯一魚食専門の魚である。口に歯は無く、代わりに喉に咽歯と呼ばれる歯を持っている。物食などに反応しやすく、時折漁船に飛び込む様子がよく見られる。体長20~30cm。



アユ 高時川などの流入河川で孵化し琵琶湖に下ったアユの仔魚は、生活の仕方の違いでオオアユ、コアユと呼ばれる。

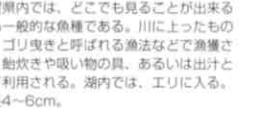
コアユ ◎アユ科 寿命は一年のため年魚と書かれることもある。体表に独特の香りがあり美味。鱗の産卵期確保のため鱗強りを持ち、同種で争う習性があり、これを利用してアユの友釣りには有名。体長15~30cm。



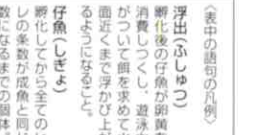
ウツセミカジカ ◎カジカ科 湖内にウツセミカジカ、流入河川上流部にはカジカが生息している。カジカと同様、小魚や水生昆虫幼虫などの小動物を常食とする。泳ぎはヨタヨタと不器用そうに見えるが、いざというときにはなかなか速い。体長7~13cm。



トウヨシノボリ ◎ハゼ科 滋賀県内では、どこでも見ることが出来る最も一般的な魚種である。川に上ったものは、ゴリ曳きと呼ばれる漁法などで漁獲され、鮎炊きや吸い物の具、あるいは汁として利用される。湖内では、エリに入る。体長4~6cm。



アカザ ◎アカザ科 完全な夜行性。水生昆虫の幼虫や小魚を食べる動物食。通常、河川中流部から上流部にかけて棲息するが、琵琶湖では北湖沿岸部や沖島湖間に棲息する。不用意につかむとよく刺される。毒は確認されていないが、ひどく痛む。体長7~10cm。



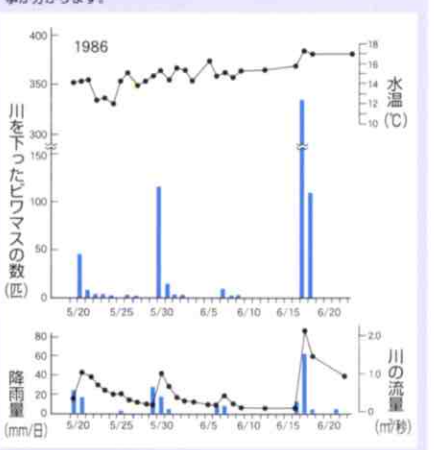
ワカ ◎コイ科 自然分布は、琵琶湖深川水系のみ。近縁の種が国内にはおらず、アジア大陸東部に多くの近縁種が生息するなど、動物地理学上興味深い種。植物食に偏った雑食性を示し、特に夏期に水生植物を餌食するため、「ワマウオ」(奈良県)の異名を持つ。体長15~30cm。



水のきれいな高時川は、多様な魚が息づく生命の川。漁業は大切な営み。

昔に比べて水量が減ったと言われている高時川。でも、その川の流れの中には、多くの川の命が息づいています。知っているようで知らない高時川の魚の生態と漁業の実態について、琵琶湖と周辺河川の魚に詳しい滋賀県農政水産部水産課参事藤岡康弘さんと、姉川・高時川流域で漁業にかかわってられる吉田哲男さん(びわ町南浜)、西村庄太郎さん(びわ町落合)と、子供の頃よく川遊びや魚獲りをされた片桐邦男さん(高月町高月)にお話をうかがいました。

図1: ビワマスの降河生態 (塩津大川にて、1986年5月19日~6月23日調査) 降雨による流量変化の割合が大きいほど多くのビワマスが降河する事が分かります。



資料提供: 藤岡康弘氏

多種多様な魚が独自の生態で生きている

琵琶湖と高時川を行き来する魚にはアユやビワマスのほかに、ヨシノボリ、カジカ、ウグイ、ニゴイなどがいます。海では生きられないビワマスは琵琶湖の固有種。姉川、安曇川、知内川など水のきれいな一部の川にしか上らず、高時川ならではの魚の一種です。

「成熟したビワマスの多くは9~11月に川を上り、10月~12月に中上流域で産卵、12月~翌年の1月頃に孵化、6月頃に琵琶湖に下り湖中で3~5年生活します。孵化した稚魚は5月頃まで川の水生昆虫などを食べて6cmほどに成長します。面白いのは琵琶湖へ戻る時期、5~7月の雨が降って増水したときに多くが川を下ります。」

「琵琶湖のアユは8月下旬~11月にかけて川で産卵、1週間~10日で孵化した稚魚は直ぐに琵琶湖へ下ります。琵琶湖でのアユは動物性プランクトン。3月から7月にかけて7~10cmほどに成長、川を上り始めます。中上流まで上ったアユは今度は川底の石についたコケをエサに成長を続け、20~25cm、大きいものだと30cmにもなります。中には川に上らず一生を琵琶湖で過ごすアユもいます。これをコアユ、春に川を上り大きく育ったものをオオアユと呼んでいます。コアユとオオアユではエサが異なるので、食べると味が違いますよ」(同)

昔は足の踏み場もないほど魚がいた

漁業資源に恵まれた高時川では、かつては漁業が盛んでした。姉川・高時川合流地点より下流域が中心で、漁法は築が主流。河口の南浜には3カ所(今は2カ所)、大浜にも2カ所(今はなし)の築があったと言います。

南浜の漁師・吉田哲男さんは昭和30~40年以前は足の踏み場もないほどたくさんの魚が上ってきたので大漁だったと言います。「なれ鮎にするワタカが主で、ウナギも獲れました。昔は種にしか獲れなかったワカサギが近年多く獲れるようになりました。モロコとウナギは減りましたね。漁法はかつては四ツ手網(※図2)、今はアンドン(※図3)の築が主流です」

「下流に築ができてからは漁をしていない人はいません。昔は春にはウグイが集団で産卵、川が黒く見えるほど集まり、地元でシャワリと呼ぶ5~10本の針がついた釣り糸で面白いほど獲れました。アユは夜間、カーバイトの明かりに寄ってくるところを投網で獲る『夜打ち』で獲りましたね。また、雨が降って川に水が増えるとき、川の中で網を持って待ち構える『待ち網』では、ビックリするほど立派な天然ウナギが獲れたものです」

取材に協力していただいた方々

- 吉田 哲男さん (びわ町南浜生まれ)
- 片桐 邦男さん (高月町生まれ)
- 西村 庄太郎さん (びわ町落合生まれ)
- 藤岡 康弘さん (滋賀県農政水産部水産課参事)

◆カッター

- 川に杭を打ち柵をつくり(この柵を築という)。魚は柵に沿って進みます。
- 魚が進んだ先には、水が勢よく流れ堰(せき)が切れたように細工をした箇所を設けます。魚はそこをすり抜け上流へ向かおうとします。
- 魚がすり抜けた先には、生簀(いけす)のような捕獲場になっており、そこからは抜けさせません。

◆アンドン

- 築は、一部分を四ツ手網の場合よりは狭く空けておきます。
- 内側に網を張った四角い柵の一方だけに2~3の入り口を設けます。その入り口は魚の侵入はできませんが、そこから逃げ出せないような仕掛けがしてあります。
- その柵を、築に設置し、魚が入った頃を見計らって電動(巻き上げ機)で柵を揚げます。

◆四ツ手網

- 川に杭を打ち柵をつくり(この柵を築(やな)という)。一部分だけ魚などの遡上(そじょう)ができるように空けておきます。
- そこに四ツ手網を仕掛けます。
- 時を見計らって網をあげ、魚を獲ります。

漁法

かかる雲の形で、いつどんな風が吹くかが分かる(吉田哲男さん)、「雨の6時間後に川の水量が増える」「春一番(3月の南風)が吹くと川が増水する」(西村庄太郎さん)などがそれです。